

被爆者の沈黙の背景と開口の契機の再考

——広島・長崎県外在住者の事例研究——

愛 葉 由 依

はじめに

1 被爆地広島・長崎県から離れた被爆者

広島・長崎県から遠く離れた地方在住の被爆者は、被爆体験の忘却に努め、その体験を語ろうとしない傾向が顕著にみられるという（石田 1986a: 219, 220）¹⁾。こうした傾向は、中国新聞社が行った2015年の被爆者アンケートにおいて、日本国内在住者と国外在住者との対比で、いっそう劇的な形で確認できる（表1を参照）。被爆から70年経っても体験を語っていない被爆者が前者では22%ほどであるが、後者では34%に達している。原爆の記憶を振り返って語る機会は、被爆地を遠く離れるほどに失われていくのであろうか。

悲劇の記憶を想起し語ることは、その悲劇の場から離れるほどに遠のいていく、あるいは、人々はその悲劇の記憶を忘れるために、その場を離れていくのか。この一見自明に思われる事柄について、そうした文化行動の構造や特質について、文化人類学の分野でこれまで立ち入った研究はなされていないように思われる。とりわけ、このような問題関心からする、広島・長崎県外在住の被爆者に注目した調査研究は、社会学の分野における被爆者研究の進展にもかかわらず、欠けているように思われる²⁾。被爆体験についてより固く口をつぐむことと、広島・長崎県という被爆地から離れた場所で生活することとの間には、何らかの相関関係があったのだろうか。現在でも、厚生労働省調査による被爆者（被爆者健康手帳保持者）の総計約13.7万人のうち、広島県在住者約6.2万人、長崎県在住者約3.5万人に対し、他県在住者が約3.9万人と28%を占める³⁾。かなりの比率の被爆者が被爆地を離れて生きてきたのである。

この他県在住の被爆者のなかには、近年になって、被爆時の体験やこれまで沈黙してきた理由について語りはじめた人々も見られる。また、澤田愛子（2012）や中澤正夫（2007）によれば、語り部活動やテレビ出演を通して体験を語っている被爆者であっても、家族に対してはそうした体験談を語るができない場合が少なくないが、同時に、このような状況を打開しようとするさまざまな取り組みも始まっているという。いずれにせよ、被爆者の平均年齢はすでに83歳を超えており、被爆者を取り巻く状況は新たな段階に入りつつあると思われる。

そこで、本稿では広島・長崎県外在住の被爆者に焦点を当て、彼らが長い間沈黙を貫いてきた理由を探る。とくに、近年になって被爆体験を語りはじめた話者のなかには、彼らがこれま

表1 2015年の中国新聞社による被爆者・在外被爆者アンケート結果
(アンケート結果をもとに筆者作成:注6参照)

		日本国内 (%)	在外被爆者 全体 (%)	韓国 (%)	北米 (%)	南米 (%)
性別	男性	52.3	44.7	60.7	24.9	56.8
	女性	44.5	52.4	37.2	71.8	38.6
	無回答	3.2	2.9	2.1	3.3	4.5
年齢	69歳以下	5.6	4.3	4.2	3.9	6.8
	70歳代	39.6	52.9	67.0	38.1	52.3
	80歳代	46.7	39.2	27.2	53.6	31.8
	90歳以上	6.6	3.1	1.6	3.3	9.1
	無回答	1.4	0.5	0	1.1	0
被爆地	広島	74.2	85.8	86.9	90.1	63.6
	長崎	22.8	9.6	5.8	7.7	34.1
	広島・長崎の両方	0.4	0.2	0.5	0	0
	無回答	2.6	4.3	6.8	2.2	2.3
被爆状況	爆心地から2キロ以内で直接被爆	27.4	42.5	56.5	31.5	27.3
	爆心地から2キロより遠くで直接被爆	32.4	34.9	30.4	36.5	47.7
	入市被爆(原爆投下から2週間以内に爆心地から2キロ以内に入市)	28.8	9.9	0.5	18.2	15.9
	入市はしなかったが、被爆者の救護や搬送などで間接被爆	4.4	2.6	0	6.1	0
	胎内で被爆	3.6	3.4	4.7	2.2	2.3
	第一種健康診断受診者証の対象区域(黒い雨地域など)において、被爆者健康手帳に切り替えた	1.4	2.4	2.1	2.2	4.5
	無回答	2.0	4.3	5.8	3.3	2.3
被爆体験を語ったり、何らかの形で伝えたりしたことがありますか	ある	74.4	63.7	52.4	75.1	65.9
	ない	22.7	34.4	46.1	23.2	29.5
	無回答	2.8	1.9	1.6	1.7	4.5
「ある」と回答した人の具体的な方法(複数回答)	家庭で子どもや孫に話した	70.0	76.6	82.0	75.0	65.5
	体験を手記に書いた	46.1	17.4	6.0	22.1	34.5
	被爆者運動や平和運動の集会で証言した	35.7	18.5	24.0	15.4	13.8
	学校で語ったり、修学旅行生に話したりした	30.8	11.7	6.0	14.7	17.2
	短歌や詩など芸術に表現した	4.6	3.4	2.0	5.1	0
	記憶をもとに絵を描いた	3.8	1.5	2.0	0	6.9
「ない」と回答した人の理由	伝える機会にめぐり合わなかった	23.9	11.9	5.7	28.6	0
	あの体験を他人に伝えることは不可能	21.6	22.4	21.6	26.2	15.4
	記憶をたどるのがつらい	20.5	31.5	33.0	28.6	30.8
	自身や家族に対する差別を招かないか心配だから	12.4	19.6	26.1	9.5	7.7
	伝えることに意味を見いだせないから	4.9	14.7	17.0	9.5	15.4

で沈黙してきた理由についても回顧し始めている人もいる。彼らの証言から、かつて彼らが語るとうしなかった、あるいは語り得なかった理由と背景を、居住する場所との関連において検討するとともに、近年になって被爆体験を語りはじめた理由とそのきっかけを考察する。あらかじめ、先行研究を見ておきたい。

2 先行研究と問題の所在

被爆者の沈黙の理由に触れているのは、まず石田忠（1986a）の研究であり、続いて濱谷正晴（2005）、直野章子（2015）など、社会学を中心とした被爆者研究である。

石田は、1977年のNGO被爆問題シンポジウムのために行われた被爆者調査（一般調査、医学調査、生活史調査）に参加し、生活史調査を担当した⁴⁾。彼は、被爆者が自ら語り始めることの重要性を主張する一方で、自分が被爆したことや原爆のことを忘れて暮らそうとする被爆者の心情について言及し、それは原爆に関するさまざまな不安におそわれることから自分を守ろうとするメカニズムにはかならないと指摘している（石田1986a: 19, 20）。そして、先にも述べたように、原爆のことを話そうとしないことは、広島・長崎県から遠く離れた地方において特に顕著だという重要な指摘をしている（石田1986a: 219, 220）。しかし、その理由や背景についての分析はみられず、その後もそれらの人々に重点を置いた研究はなされていない。

濱谷は、1985年に日本原水爆被害者団体協議会（以下、日本被団協）が実施した「原爆被害者調査」⁵⁾に携わり、その結果を心の傷、体の傷、不安という三つの被害の領域別に分析した。彼によれば、1980年の「原爆被害者対策基本問題懇親会答申」のなかで国が被爆者に原爆被害の「受忍」を強いたこと、言論人、学者、国民世論が被爆者に「沈黙」を強いたこと、それらが戦争責任を追求してきた被爆者の運動を封じ込めることもあったという（濱谷2005: 258）。さらに、生存者が苦痛を乗り越えて証言することに意味を感じ取ることができなければ、その体験は明るみに出されないまま、心身の奥深くに閉じ込められてしまうと指摘する（濱谷2005: 258, 259）。

直野は、被爆者の主体性の構築と記憶と想起との関係について検討している。そして、沈黙の要因として、「思いだすのもいや」という記憶の過酷さに加え、「隣近所、親戚や家族といった生活共同体こそが、原爆被害者を差別し、虐げ、その苦悩を深め、さらに、そうした現状を語らせないよう圧力をかけている」（直野2015: 106）としている。

以上のように、被爆者が体験を語らなかった理由としては、その当時の記憶を忘れたい・思い出したくない、語る意味や表現する言葉が見出せない、という個人的な感情が一貫して底流にある。これに加え、被爆者に向けられる偏見や差別、国による受忍論などといった社会的・政治的背景が被爆者の沈黙に影響を与えていることが示されている。

さらに、澤田や中澤は、家族に対して体験を語ることが困難となっている被爆者の状況についても指摘している。

長崎県の被爆者とその子ども、孫の三世代に聞き取り調査を行った澤田は、被爆者は、特に家族に対してほとんど語っておらず、語り部活動をしている人であっても、家族にはほとんど体験を語っておらず、家族側もあえて聞こうとしなかったと指摘している（澤田 2012: 138）。被爆者には、家族くらいは自分の記憶から自由にさせてやりたいという思いや、恐ろしい話題で子ども達の健全な成長を妨げてはならないという配慮があったのではないかと澤田は推測している（澤田 2012: 138）。

中澤は精神科に通う東京都在住の被爆者を対象に研究を進め、澤田（2012）と同様に、語り部活動やテレビ出演をしている被爆者であっても、子どもを巻きこみたくないという思いや他人に話すときのように思いや感情をこめて話せないことを理由に、子どもたちにはなかなか伝えることができている状況にあると指摘している（中澤 2007: 131, 132）。子どもたちも、これ以上、親を苦しめたくないという思いから、あえて聞くことをしていない状況にあるという（中澤 2007: 131, 132）。さらに、これには、子どもの前で涙することはできないという日本の家族内関係も関係していると中澤は指摘する（中澤 2007: 131, 132）。その一方で、話は聞かなくてもいいから、せめて自分の書いたものを読んでほしいという思いで、自分史や被爆体験を書き残し、それを公表する人の例も示している（中澤 2007: 131, 132）。

さらに、2015年に中国新聞社が行った被爆者アンケート⁶⁾では、何らかの形で体験を語っている人の割合、語っていない人の割合、体験を語る具体的な方法、家族に語っている人の割合が明らかにされている。被爆から70年経っても体験を語っていない国外在住被爆者の割合が日本国内在住被爆者より多く、国外在住被爆者が体験を語っていない理由には「記憶をたどるのがつらい」が上位に位置している。一方で、国内在住者は一括りにされ、それぞれの差異は検討されておらず、語りはじめたきっかけについても、このアンケートでは示されていない。

3 本稿の目的と方法

被爆者を取り巻く状況や彼らの被爆体験との向き合い方が新たな段階に入りつつある今、仮に広島・長崎県外在住の被爆者が長年にわたって被爆体験を忘れる努力をしたり、被爆体験を周囲に話そうとしなかった傾向がより強かったとすれば、彼ら自身はその理由と背景についてどのように認識しているのか、検討することが可能になりつつある。本稿は、彼らの被爆体験との向き合い方や被爆体験の語り方と、生活する場所との関係をあらためて検討するものである。

筆者による聞き取りと近年の証言映像、自分史のうち、被爆地からの移住と、移住先で沈黙したことについて触れている事例を重点的に取り上げ、出身地、移住の背景・理由、移住先での被爆者を取り巻く環境、体験を語り始めた契機へ着目する点が、これまでの先行研究に対する本稿の特色である。

以下、なお限られた少数の事例研究にすぎないが、本論となる第2章で、被爆地出身で逃避・忘却のために被爆地外へ移住し、長年沈黙を貫いた3名、第3章で、被爆地出身で逃避・忘却

以外の理由で被爆地外へ移住し、長年沈黙を貫いた3名、第4章で、被爆地以外出身で被爆後に帰郷し、長年沈黙を貫いた2名を対象とする。被爆者の広島・長崎県外への移住と沈黙との相関を実証するため、第5章では、広島・長崎県外移住者で積極的に被爆体験を語ってきた2名の事例を対象とする。これらの人々の語りの内容を上述の問題関心に沿って考察したい。

なお、沈黙を貫いてきた人々が沈黙を破り始めるのは、いずれも1990年代以降のことであり、時代的には冷戦後の時期が対象となる。そこで、あらかじめ、事例研究の背景となる社会的・政治的背景について、基本的な事項に第1章で触れておきたい。冷戦後の新たな、核問題と被爆者をめぐる状況である。そして、第6章で、本章で考察した語りの特徴を取りまとめ、その上で今後の研究への展望を示しておきたい。

第1章 冷戦後の核問題と被爆者をめぐる状況

冷戦後の1990年代から2000年代にかけて、核問題と被爆者をめぐる状況は、次のように変化していった⁷⁾。

日本国内において、1994年には、「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」（1957年制定）と「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」（1968年制定）が一本化される形で「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」（被爆者援護法）が成立し、翌年7月に施行された。1995年には、被爆50周年行事が各地で行われた。また、広島市から国への働きかけ、全国的な署名運動の結果、1995年に原爆ドームは史跡に指定され、国からの推薦を経て1996年には世界遺産に認定された。1996年には、日本原水爆被害者団体協議会は結成40周年を迎え、記念式典を行った。

世界では、1993年に核弾頭を運搬するミサイルおよび爆撃機の数量削減を目指す第二次戦略兵器削減条約（START II）にアメリカとロシアが署名し、1995年には、ニューヨークで行われたNPT（核不拡散条約）運用検討会議において、NPTの無期限延長が決定された。

このように核軍縮・核不拡散に向かいつつあった一方で、1998年には、インド・パキスタンで核実験が行われ、被爆者はそれらに対し抗議運動を行った。1999年には、東海村で臨界事故により社員が被曝死する事態も発生した。2001年にはアメリカで同時多発テロが発生し、核テロの脅威が現実味を帯びるようになり、2003年にはイラク戦争も勃発した。2005年に行われたNPT再検討会議も失敗に終わった。

それらと並行して、日本国内では、2002年に原爆症認定集団申請の開始、在外被爆者「郭貴勲」裁判の勝利、官房長官による非核三原則の見直し発言に続いて、2003年には日本各地で原爆症認定集団訴訟が行われるようになった。

その後、2006年、2009年には北朝鮮で核実験が繰り返されるなか、2009年には、チェコ首都プラハでオバマアメリカ大統領（当時）が「核なき世界」を目標に掲げた演説を行った。

その翌年の2010年に行われたNPT再検討会議では、「核兵器のない世界」の実現を目指す最終文書の採択に至った。しかし、2011年には、福島第一原子力発電所の事故が発生し、再び核や放射線への関心・脅威が高まるようになった。

被爆から70年となる2015年前後には、被爆者の平均年齢が80歳を超え、その絶対数の減少も加速し、被爆体験も風化しつつあったことから、被爆体験の継承の重要性・必要性が改めて取り上げられるようになった。2015年のNPT再検討会議では、議論の結果をまとめる最終文書を採択できないまま閉幕したものの、2016年には、オバマアメリカ大統領（当時）が現職アメリカ大統領として、はじめて広島県に訪問し、オバマ政権による核軍縮・核不拡散への期待も再び高まっていった。その流れに乗るように、2017年には、核兵器禁止条約が採択され、核兵器の禁止・廃絶を目指すNGOのICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がノーベル平和賞を受賞した。

しかし、2016年、2017年には北朝鮮による核実験が度重なり、2018年のトランプ政権下においては、アメリカの核戦略の見直しが行われ、核兵器の近代化の方針が示されただけでなく、アメリカとロシアはともに中距離核（INF）全廃条約を破棄する方針を表明した。この数年においては、核軍縮・核不拡散の動きが一変し、核開発や核拡散への動きとそれに対して被爆者が抱く危機感が再び高まりつつあると言える。

第2章 事例：被爆地出身で忘却・逃避のために被爆地外へ移住した被爆者

本章では、被爆地出身で、忘却・逃避のために被爆地外へ移り住んだ被爆者3名の事例を取り上げ、長年沈黙を貫いてきた理由・背景、移住先での被爆者を取り巻く環境、体験について語りはじめたきっかけを以下で紹介する。

2-1 長崎県出身で愛知県に移住した女性（9歳のとき、長崎県で入市被爆）

この女性は、長崎県や福岡県での就職時の差別や長崎県で結婚を考えた相手の親からの偏見に遭い、それらから逃れなければ生きていけないと思い、17歳のときに愛知県に移り住んだ。

長崎には（被爆者ができる仕事は）なくて、福岡の方まで仕事に行っただけですけど、被爆者とわかると、〔中略〕「あんたと一緒におると、私たちまで被爆者になっちゃうから」と、いじめるんですよ、（そこに）いることができなくて、どっかに（仕事がないかな）と思って行くんですけど、〔中略〕魚を干物で干してやる仕事があったから行ったら、「そんな被爆者にやらせる仕事はない」〔中略〕子守りに行ったら、「被爆者にみてもらう子どもはいない」って言ってね、やめさせられた。そういうことが往々にしてあったもんですから。〔中略〕一度は、長崎にいるときに、将来は一緒になりたいという人もいたんです

けど、その人の親から、「被爆者は絶対結婚させることはできない」と「どこまでいってもあなたは被爆者だからね」と念おされて、ああ、被爆者は絶対結婚もできないのかと思って、死のうと思いましたよ。（2017年4月19日の筆者による聞き取り）

彼女は、愛知県に移り住んでからは、出身地をごまかしたり、長崎弁も話さないようにしたり、被爆者であることを悟られないよう工夫を重ねた。その後、愛知県で結婚し、子どもを授かったが、結婚相手や子どもたちにも被爆していることを話さなかった。

しかし、彼女は、2011年の東日本大震災の津波の映像によって被爆時の情景がよみがえり、錯乱状態になったことを機に、家族に被爆者であることを打ち明けた。それ以来、子や孫のために核廃絶を願い、体験を綴り、新聞やテレビの取材にも応じるようになった。2017年時点では、まだ子どもたちへは詳しい話ができていなかったが2019年には次のように語っていた。

私の子どもたちにも、私の話をしっかりしてますもんで。〔中略〕今喋っとかなければ、私がいなくなったら、喋る人いないよって言って。無理やり話をしています。（2019年6月9日、筆者との電話）

2-2 長崎県出身でメキシコに移住した男性（6歳のとき、長崎県で被爆）

この男性は、被爆後に勤めた長崎県の原爆病院で被爆者が病気で苦しむ様子を日々目の当たりにするなかで、自分も同じようになるのではないかという恐怖心を抱くようになり、被爆者であることや被爆の記憶から逃れたいという思いで、1968年にメキシコへ移り住んだ。

（沈黙を貫いたのは）苦しいからです。忘れたいという気持ちが私にはずっとありましたから、私が被爆者ではありたくないと思っていたし、それを隠そうと思っていましたから、忘れるためにメキシコへ行ったわけですからね。話すことによってまた、自分が被爆者だという、ああいうみじめなね、苦しい体験をしたという日のことを思い出すのはイヤだと思ってましたからね。それで、絶対に人には話さないと思ってたんです。（2012年収録 NHK「原爆の記憶 ヒロシマ・ナガサキ」の証言映像）⁸⁾

彼は、メキシコに渡ってから沈黙を貫いていたが、メキシコに渡って間もない頃、事件や軍のパレードを契機に被爆時の記憶が不意によみがえってきてしまったときに、被爆体験は逃れることができない現実であることに気付いた。そして、唯一被爆について伝えていた友人からの依頼で1995年から体験を語りはじめた。

1995年に〔中略〕親友から電話がかかってきて、息子が行っている大学で被爆体験を話

してくれませんか？って言われたんですよ。〔中略〕僕はね、イヤですと言ったんですね。〔中略〕でもね、〔中略〕本当に重要なことだから是非やってくれと、それでそれを引き受けてその大学へ行ってやったんですが、〔中略〕本当にやる気がだんだんだんだんなくなってきて、怖くなってどうしようと思った、でももう約束したことだしやらないといけないと覚悟を決めて、話を始めて、最初は辛かったんですけど、話を終えた時に、何か気分がスーッとような気がしたんですよ。これはやはり話すことによって自分の辛さが少しね、少なくなるんじゃないかっていう気が始めて、それじゃあ機会があれば話をしようかなっていうふうになってきたんですね。〔中略〕私の体験談をね、残しておくっていうのも重要なことだと思うようになりましたし、もし被爆者がいなくなれば、誰も話すような人がいなくなるし、直接に話せるっていうのは僕らの年代が最後じゃないかとも思っていますね。(2012年収録 NHK「原爆の記憶 ヒロシマ・ナガサキ」の証言映像)

2-3 長崎県出身でアメリカを経て愛知県に移住した男性①(12歳のとき、長崎県で被爆)

この男性は、被爆体験を早く忘れてしまいたいという思いが先行し、アメリカへ渡って仕事に就いた。

私はね、最初、もう忘れたいと思ってた。もうこんな経験は早く忘れてしまいたいというのが最初の考え方だったんだわ。みじめなものを見るよりも、もっと幸せなものにね、プラス思考に考えようというような、悲惨なことばかり考えると人間暗くなるもので、もっと明るい方に考える、そういう生活を送りたいなあ、と。(2008年9月6日収録 被爆体験聞き取りプロジェクト⁹⁾による証言映像)

その後、日本に帰国し、愛知県にある会社に就職したが、その会社が保守的な傾向だったため、革新的だと捉えられがちな被爆者運動や語り部の活動に携わることは困難だった。

被爆者はみんな革新だと決め込んでしまってるもので、原爆の活動に行くとか(やりづらい)、やっぱりね、被爆者のなかでも出世したいんですよ。だから被爆者として活動すると、出世ができんものでね、なかなか(活動できない)。〔中略〕私も被爆者だということは、ある程度、身内の中には言ってたけど、大きな活動はできないもので、(仕事を)休むときでも、原爆の検診に行くとか言って休んでましたけど。大きくはなかなかちょっとできなかったもので。(2008年9月6日収録 被爆体験聞き取りプロジェクトによる証言映像)

彼は、愛知県のなかでも被爆者の活動が盛んな地域に転勤後、1990年代に定年退職すると、語り部やその地域の被爆者の会の活動に参加するようになった。

定年になってから、自分の身が自由になって、ちょっと大きいことも言えるな、と思って、こういうふうな活動に少し参加するようになったんですけど。（2008年9月6日収録 被爆体験聞き取りプロジェクトによる証言映像）

第3章 事例：被爆地出身で忘却・逃避以外の理由で被爆地外へ移住した被爆者

本章では、被爆地出身で、結婚、就職、親の仕事の都合により被爆地外へ移り住んだ被爆者3名の事例を取り上げ、長年沈黙を貫いてきた理由・背景、移住先での被爆者を取り巻く環境、体験について語りはじめたきっかけを以下に紹介する。

3-1 広島県出身で神奈川県へ移住した女性（11歳のとき、広島県で被爆）

この女性は、原爆孤児となり、病いとも闘う日々を送った。仕事を求めて神奈川県へ移住し、30歳のときに神奈川県で結婚した。

長い間、被爆の事は話さなかったんです。伝染病のように言う人がいるし。変な目で見える人がいるから。〔中略〕主人は、「知ってる人によく伝染病のような人と結婚したね」と言われたそうです。私は「もう誰にも話さないで」と言いました。主人と結婚してもう42年になりますが、病気は主人にうつらないんだから伝染病じゃないです。今は分かってくれる人も少しずつ増えて来ましたが、昭和の頃はまだまだ理解してくれる人は少なかったんです。平成になって、いろいろなところでお話しして理解してくれる人も増えました。チェルノブイリ事故の影響もあり、それから大分変わって来たように思います。（2006年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館アーカイブス」の証言映像）¹⁰⁾

3-2 広島県出身で北海道へ移住した男性（4歳のとき、広島県で被爆）

この男性は、1948年に北海道に新設された役所に父親が転職すると、家族で北海道に移り住んだ。彼は体調不良に見舞われ、休学しながらの小学校生活を送った後、中学校に進学した。

中学の時、数学の授業の時に問題を出した先生がみんなにテーマを与えた後、後ろからみんなの様子を見ながら、夏だったので半袖の私の腕を持ち上げて、「何この老人みたいな手」って言われたりしました。「この皮膚なんなのこれ」と言われました。それがまた、すごいショックでした。親父もどうせ長生きしない子どもだと思ったので、割と私のわがままを聞いてくれて隣の中学校に転校しました。そして広島の話をついに封印しました。〔中略〕一時ABCC（原爆傷害調査委員会）が話題となり、とにかく実験台にされるのは嫌だというそういう変な拒絶感を持っていたのです。〔中略〕だから名乗り出ないほうがいいな

と、暗黙に思っていました。(2018年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館アーカイブス」の証言映像)¹¹⁾

さらに、第五福竜丸の事件と白血病の犠牲者の存在が彼に強い恐怖心を抱かせた。

昭和29年に無事(小学校を)卒業して、すべて終わったという感覚でいた時に、ビキニ環礁の第五福竜丸の事件が起きました。中学に入った半年後ぐらいに久保山愛吉さんが亡くなりました。その辺から白血病だとか、がんだとか、広島の生き残りにいろいろ問題が起きるっていうこと、後遺症があるっていうことが盛んに言われだして、自分でもすごい不安なのに、周囲もお前大丈夫かと聞かれました。そして、小学、中学の同級生で、2学期が始まって隣のクラスにいたなと思った人の姿が10日ぐらい見えなくないなと思ったら、白血病で亡くなっていたのです。これは広島は関係ないのですが、白血病というのは、すごく怖い病気だと思いました。(2018年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館アーカイブス」の証言映像)

彼は、2010年代になって体験を語りはじめた理由について次のように語った。

あまり公の場面で、体験談を話したことはなかったです。ところが(ここ)3～4年ですが、〔中略〕どうも語り部活動というものに自分なりに疑問を持っていました。僕はもう生の話、明暗知ってる人間だから、もうちょっと、広島・長崎がなぜ、尊厳ある遺体の写真などを展示にしてまで、世界に訴えてるかという原点を、もう1回ちゃんと伝えないとイケません。〔中略〕今、広島に落とされた原爆くらいの能力は、そこそこの人たちと材料あれば作れると言われているので、〔中略〕自爆覚悟でやってやるぞなんて人がいたときには、どうにもならない怖さがあります。だからそういうことを考えていくと、やっぱり核は怖いし、中学生のあなた方だって俺関係ないよではなくて、むしろ先の短い我々が関係ないのであって、あなたたちが、一番関係ある時代を、これから担うんだという意識を持ってくれないと、ダメだという話もしています。(2018年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館アーカイブス」の証言映像)

3-3 広島県出身で大阪府を経て愛知県に移住した男性(15歳のとき、広島県で被爆)

この男性は、被爆から1年後には、父親の転勤で大阪府の学校に進学した。その後、父親の仕事の転勤で移り住んだ愛知県で教員になった。彼は、名古屋市原爆被爆者の会の会長と偶然知り合ったことがきっかけとなり、1966年に被爆者健康手帳を取得したが、そのときまで被爆者であるという自覚はなかった。

どちらかというと、原爆から逃げることに全力をつくしていたような気がする。広島のことを忘れよう忘れようとしていた。これは被爆して一年後に大阪の学校に進学したこと、続いて父親の転勤のこともあって名古屋で生活することになり、広島から遠ざかったことも原因のひとつであった。まわりに被爆者がいないことや、広島でのあの惨状を忘れようと努力したことも原因だった。しかし、原爆から逃げ去ることはできなかった。〔中略〕体の具合が悪くなると、これは原爆のせいではないかと原爆に結び付けて考えるありさまであった。〔中略〕中学校の教師として働いていたが、授業中に急に貧血が起り倒れることも何回かあった。忘れようとしても忘れることができない。これが原爆の本質だと気付くのに約二十年かかった。この間、被爆者健康手帳のあることも、自分のまわりに多くの被爆者が生活していることも、知らなかった。そればかりか、多くの被爆者が自分の権利のためにたたかって運動をすすめていることや、核兵器を無くすために多くの人たちが運動を続けていることなど、全く知らず無知の状態であった。そのころ、すでに結婚をしており二児の父親であった。そのような有様だから、結婚したときは自分が被爆者であることなんて、相手（私の妻）には一言も話していなかった。その後、自分が広島で原爆の被害を受けたことの話をして許しを請うという始末であった。（愛知自分史の会 2008: 46-47）

さらに、彼は、2008年時点において、自分史を活用して、孫に体験を継承しようという試みもしていた。

第4章 事例：被爆地外出身で一時的に被爆地で居住し、帰郷した被爆者

本章では、被爆地外出身で、一時的に被爆地で居住し、被爆後に帰郷した被爆者2名の事例を取り上げ、長年沈黙を貫いてきた理由・背景、帰郷先での被爆者を取り巻く環境を以下に紹介する。

4-1 群馬県出身で群馬県へ帰還した男性（22歳のとき、広島県で被爆）

この男性は、群馬県の桐生で生まれ育ち、広島県の通信部隊に入隊した。原爆で右半身に大火傷を負い、意識も失ったが、9月下旬には入院先の病院を自ら退院し、いち早く群馬県桐生に帰郷した。

被爆した事は、明かさなかったです。家の人も知らなかったです。つい最近、町内の民生委員の人に、少し話したぐらいです。原爆で体中傷だらけだと言うと、何でその話をしないんだと言われました。話したく無かったんです、だから隠してました。昔は酷くて恥ずかしかったんです。夏でも半袖の服を着たこと無かったです。最近になって、平気で着ら

れるようになりました。右半分は薄くなりましたが、痕が残ってます。帽子を被って顔から肩にかけて体半分が火傷でした。顔の痕はやっと消えました。忘れたくて、自分では言う気がしなかったんです。原爆という言葉は、自分で体験しているだけに使いたくなかったです。〔中略〕聞かれば、「ただ原爆にやられたんです」と言って、多くは語りませんでした。(2006年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館アーカイブス」の証言映像)¹²⁾

4-2 アメリカ出身でアメリカへ帰国した女性（13歳のとき、広島県で入市被爆）

この女性は、アメリカで生まれ育ったが、子どもに日本の教育を受けさせたいという父の希望により、1937年、5歳のときに家族と広島県に渡った。

彼女は13歳のとき、直爆からは免れたが、2人の姉を探すために爆心地付近に入り、入市被爆した。2人の姉は焼け焦げた遺体となって見つかった。「姉がいない日本にはいたくなかった、どこかちがうところに行きたいと思った」ことに加え、娘を亡くした悲しみに暮れる両親をアメリカに呼び寄せたいという思いから、1950年、18歳のときにひとり渡米した。

渡米後、トイレで倒れたことがあり、そのときは原爆のせいではないかと思ったという。その後、彼女は、アメリカで日系人と結婚するが、夫から被爆について問われた。

うちのハズバンドが「あんたは広島で原爆にやられとるのか。」言うちよったから「わたし広島で原爆、わたしは市へ後から入ったんです」って言うたの。〔中略〕そしたらハズバンドのママが「そんなこと言うたらいけないよ。原爆じゃなんて誰にも言うたらいけないよ」ってそのときお母さんが口止めしたの、わたしに。原爆いうのは、何か感染する病気がアメリカではそういうよううわさが立ってたらしいのね。(2008年収録 NHK「原爆の記憶 ヒロシマ・ナガサキ」の証言映像)¹³⁾

彼女が病気をすると、見舞いに来た義母が「あんたもう原爆のあれが出てきたんじゃないかね」と言うこともあった。さらに、彼女は、裁判でアメリカに対して在米被爆者への支援を求めるも、原爆投下は日本の真珠湾攻撃に対する報復であるため、その犠牲者についてアメリカは責任を取らないとアメリカの裁判官から要求を棄却されたこともあった。

第5章 事例：広島・長崎県外に移住し、積極的に被爆体験を語ってきた被爆者

本章では、被爆地出身で、進学や結婚、親の仕事の都合により被爆地外へ移り住み、積極的に体験を語ってきた被爆者2名の事例を取り上げ、沈黙しなかった理由・背景、移住先での被爆者を取り巻く環境、体験について語りはじめたきっかけを以下に紹介する。

5-1 広島県出身でアメリカを経てカナダへ移住した女性（13歳のときに、広島県で被爆）

彼女は、原爆から生き延びたが、姉とおいを亡くした。彼女は広島県の大学を卒業後、1954年にアメリカの大学から奨学金をもらい、ひとり渡米した。

ビキニの水爆実験があった年でした。〔中略〕その年の夏、8月に私がアメリカに到着しました。広島からの生き残りが来るということで、到着するやいなや記者会見があり、一人の記者からビキニ問題について意見を聞かれました。当時大学を出たばかりで世間のことも分らなかった私は、正直に思う事を全部言ってしまいました。するとその翌日から匿名のおどしの手紙が大学に来るようになりました。誰がお金を出してやってると思うのかとか、アメリカの核政策に反対するやつはとか、パールハーバーは誰が始めたんだなど、たくさんのおどしの手紙でした。〔中略〕ですから学校にも行けず、教授のお宅で一週間一人で考えました。来たばかりで日本には帰るわけにはいかない。この新大陸でどう生きていけばいいのだろうともんもんとしてました。でも結果的にはそれが契機となり、私の使命はこうなんだと確認する機会となりました。自分の特殊な責任というものを感じたわけです。（2014年収録「国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館」の証言映像¹⁴⁾

彼女はアメリカで出会った男性と結婚し、1955年にカナダに移り住んでからも、原爆はカナダに無関係な問題ではないと、積極的に体験を語っている。

5-2 広島県出身で愛知県へ移住した女性（4歳のときに、広島県で被爆）

この女性は、被爆後、家族とともに岐阜県にあった親戚の家にしばらくお世話になったあと、父親の仕事の都合で愛知県に移り住んだ。彼女は、小学生の頃から被爆したことを隠したりせず、友達から身体の傷痕のことを聞かれると、広島県で原爆に遭ったことを説明していた。

私は、「傷どうしたの？」って言われるから、「広島原爆で……」って言いながら、小学校の頃から（広島の）祖母の家を行ったり来たりしてるわけでしょ、だから被爆したっていうことを隠しようがないし、別にそれを隠さなきゃいけないことだと思ったこともないんですよ。差別されていじめられたってということもないし。多分強かったのかもしれないけども、いじめられた記憶もないです。広島で原爆にあったことは事実なんだから、悪いことなんて思っていないから。（2017年6月16日、筆者による聞き取り）

高校生の頃には、愛知県で結成された被爆者懇談会に関心を持ち、自分にも手伝えることがないかと、新聞に掲載された連絡先に自ら連絡を取っていた。このときは、被爆者懇談会から学業に専念するよう言われたというが、彼女は比較的若い頃から被爆体験を語り、高校卒業後

は被爆者運動にも積極的に取り組んできた。さらに、彼女は、20歳前後で学校の事務員として働きはじめると、社会発展史を学ぶグループに誘われた。そこで、彼女は、物の見方・考え方を学び、なぜ日本に原爆が落とされたのかということ、軍事的・政治的・経済的な視点から捉えることができるようになったという。そういった活動のなかで知り合った人と1964年に結婚すると、子育てをしながらも月1回程度は被爆者運動に顔を出していた。多くの被爆者が、家族には自分の体験を詳しく語っていないなか、彼女は息子や孫を連れて、何度も広島県の平和記念資料館などへもしている。

第6章 事例の考察

6-1 沈黙の理由とその背景

第2章で取り上げた人々は、就職や結婚の際に被爆地やその周辺地域で偏見や風評被害にあうことや、身のまわりの被爆者が病いを患い苦しむ様子を日々目の当たりにすることから逃れるために非被爆地へ移住した。このことから、移住先で沈黙を貫いた理由にも、それらの忘却やそれらからの逃避が一番に挙げられる傾向にある。これらの人々は、被爆地を離れることで、被爆体験の忘却・沈黙に努め、被爆者であることに囚われない新たな自分を構築しようとした点が特徴的である。これらの人々が非被爆地で被爆者であることに囚われない新たな自分を構築することは、沈黙によって得たひとつの利点である一方で、これらの人々がより一層沈黙を継続することにもつながったと考えられる。

さらに、2-3の事例のような保守的な会社では、被爆者の運動や活動は一括して革新的だと理解されてしまう傾向があり、それは昇進に不利になると考えられていたことも、被爆者を沈黙へと導いた。これは、石田が、被爆者の活動や集まりは、“アカ”だと噂されたことを指摘(石田1986a: 38)していることとも関連する。これまでの先行研究では、体験を思い出したくない・忘れたい、被爆者であることから逃れたい、体験を語る意味や言葉を見出せないといったことが沈黙の理由として強調される傾向にあったが、本稿で取り上げた事例からは、保守的な会社での出世、1950年代から1960年代にかけての反共の風潮への配慮もひとつの理由となっていたことが見えてきた。これらから、第2章で取り上げた人々は、自らの身を守ることと、反共の風潮への配慮から、意図的に沈黙する傾向が強かったと考えられる。

第3章で取り上げた、結婚や就職、親の仕事の都合で非被爆地へ移住した人々は、自ら意図的に忘却・沈黙する傾向と意図せず忘却・沈黙する傾向があった。まず、移住先で、伝染病のような扱いを受けたり、それが家族にまで影響を与えたり、被爆によるケロイドを見世物にされ、クラスメイトから心ない言葉を投げかけられたりしたことを3-1や3-2から読み取ることができる。さらに、被爆地を離れても、ABCCの存在が大きく、第五福竜丸の事件を機に白血病への恐怖もより一層大きくなったことが3-2からわかる。被爆者のなかには、移住先に

においても、このような状況に置かれた人も多くいたために、それらから逃れ、自分自身や家族を守ろうと自ら意図的に被爆体験について忘却・沈黙するようになったと考えられる。

そして、3-3においては、非被爆地で被爆体験を忘却しようとしたことだけでなく、被爆後すぐに被爆地から離れて生活したことも被爆体験の忘却につながったと捉えられている。3-3で言及されているように、確かに、非被爆地では被爆地のように多くの被爆者が身近にいるような環境にはなく、身近にいたとしても被爆していることを沈黙する傾向にあればお互いに気付くことも少なかったと言える。したがって、非被爆地では、被爆地に比べ自分自身や家族以外の被爆者と接する機会は自ずと少なくなる。被爆地を離れ、このような環境に置かれたことも、意図せず、被爆体験について忘却・沈黙するようになったことにつながったと考えられる。

第4章で取り上げた、被爆地以外出身で一時的に被爆地で暮らしていた人々は、帰郷を主な理由に被爆地を離れ、自ら意図的に忘却・沈黙する傾向と他者からの抑圧により忘却・沈黙する傾向があった。まず、火傷の痕を見られたくない、忘れたいという思いから、意図的に被爆体験について忘却・沈黙する傾向が4-1から見受けられる。そして、4-2から、被爆者はアメリカでも伝染病のような扱いを受けることがあったこと、非被爆者の日系人の義母からの口止めと病と被爆の関連への疑いがあったこと、原爆肯定論が一般的だったことから、アメリカ社会での抑圧や他者からの抑圧によって、被爆体験を沈黙する傾向にあったと考えられる。

また、被爆者のなかには、語り部の活動やテレビ出演はしながらも、家族には語るができない人も存在していることを、澤田（2012）や中澤（2007）が指摘しているが、本稿の2-1や4-1においても、類似したケースが確認できる。濱谷（2005）は、多くの被爆者が「家族に囲まれて暮らすこと」を生きる支えにしていたと指摘している。だが、家族に囲まれて暮らしたいからこそ、家族から敬遠されてしまうことや家族に余計な心配を与えてしまうことを恐れて、あえて自身の体験を家族には語らなかつたり、打ち明けなかつたりする期間が長く続いていた、と考えてよいのではなかろうか。

一方で、第5章で取り上げたように、広島・長崎県外移住者でも積極的に体験を語った人々は、次のような特徴があった。まず、非被爆地で被爆による傷痕に関して事情を聞かれることがあっても、隠すことなく被爆体験を説明し、差別にも遭うことはなかった。そして、被爆後、比較的早い段階で自身の体験を相対化し、意味づけする機会に恵まれている。

アメリカに渡った女性は、アメリカで受けた取材が、アメリカの原爆の捉え方や日本に対する激しい批判を知る機会となったことで、自分自身の体験や原爆を客観視する視点を得るとともに、自身が体験を語る使命を見出したと考えられる。愛知県に移住した女性も、小学生の頃から傷痕を通して友達に被爆体験を説明し、その後も、被爆者運動や社会発展史を学ぶグループへの参加を通して、自身の体験を多角的に捉え直す機会を得ている。

これらから、被爆者に対する偏見が強かったことや被爆によるケロイドや傷痕を見世物にされ、心ない言葉をかけられたこと、被爆から早い段階で自分の体験を多角的に捉え相対化する

機会がほとんどなかったことが、第2章から第4章で取り上げた人々の多くを沈黙へ導いたと言える。それに加え、被爆地のように身近に多くの被爆者がいない生活環境における被爆体験の忘却、非被爆地での被爆に囚われない新たな自分の構築、アメリカ社会での抑圧、移住時に結婚や就職、昇進を考える年齢だったことも、被爆者が移住先で沈黙を選択する傾向を強めたと言える。

6-2 語りはじめたきっかけ

非被爆地へ移住し、長い間沈黙を貫いた人々のなかには、1990年前後から2010年代になってようやく語り始めた人々がいることが本稿で取り上げた事例から見えてきた。

2-2の友人からの依頼で1995年によく語りはじめた在外被爆者の事例においては、被爆者自身が被爆者の高齢化と絶対数の減少を自覚するようになっていたことが、自らの体験を語る事が出来る最後の世代として、体験を語る役割を引き受け、過去の体験や自分自身と向き合うことを決意させたと言える。さらに、被爆時の記憶がよみがえってきた際に、被爆体験は逃れることができない現実だと気付いたことも、沈黙を破り、被爆体験と向き合っていく動機づけになったと言える。

2-3の1990年代に定年退職した事例においては、「定年になってから、自分の身が自由になって、ちょっと大きいとも言えるな、と思って」とあるように、定年退職を機に昇進に与える影響や会社の人々の目も気にする必要はなくなったことが、長年の沈黙を破る後押しになったと考えられる。

3-1の「平成になって、いろいろなところでお話しして理解してくれる人も増えました。チェルノブイリ事故の影響もあり、それから大分変わって来たように思います」という語りから、平成以降は、被爆体験に対する聞き手の受け止め方も好意的になっていたことを読み取ることができ、このことも被爆者の開口を導いたと考えられる。

2-1の2011年の東日本大震災の津波の映像を機に記憶がよみがえってきてしまった事例においては、錯乱状態に陥り、家族に打明けざるを得なくなったことに加え、直後に起きた福島第一原子力発電所事故を受け、被爆体験があるひとりとして後世に語る必要性を感じたことも、体験を語るきっかけとなっていた。3-2においても、科学技術の発展、核の脅威の高まり、自爆テロの頻発といった背景のなかで、原爆の脅威を知る者として体験を語る必要性和使命感を感じたことが語り始めるきっかけとなっていた。

さらに、長い間家族には体験を語らなかつた人が、核使用の危険性が高まるなかで、家族を含めた未来の世代に同じような経験をさせたくないという思いや、記憶の継承への願いから、2000年以降に自分史を活用したり、直接語りかけたりすることで、被爆体験を伝え始めるケースもあった。特に3-3の自分史を活用する事例は、話は聞かなくてもいいからであり、せめて自分の書いたものを読んでほしいという思いから自分史や被爆体験を書き残し、それを公表す

るケースもあるという、中澤（2007）の指摘とも類似している。

前節では、沈黙することによる利点や安定も見受けられたが、2-1、2-2、3-3のように、震災や事件、体調不良時などに記憶がよみがえってしまうことで、そのような沈黙による安定が破綻する事例も確認できた。その際に、被爆体験は忘れることができないものだと思い付いたことが、他者に対してだけでなく、家族に対しても語り始めるきっかけとなったことがわかる。そして、彼らは、そのような破綻を乗り越えるために語るという側面もあると言える。

1990年前後から2010年代においては、かつて被爆者を悩ませた被爆者への差別や偏見も軽減し、むしろ体験の継承が求められるようになり、それらは、長年沈黙を貫いてきた被爆者が体験に向き合い、語りをはじめることへの後押しにもなっていたと言える。それに加え、被爆者の高齢化と被爆体験の継承の問題を被爆者自身も自覚するようになったことにより、子どもや孫の将来のことを考え、自身の体験を墓場まで持っていくことなく、家族にも共有するという決断に至ったと考えてよいであろう。被爆者の場合は、単なる反戦ではなく、後世に核の危険性や放射線被害の脅威を伝えるために語っている点が特徴的であると言える。

アスマン（2013）は、1990年代以降、ホロコーストの想起が構築されることにより、忘れることから、繰り返さないために想起することへ切り替えられ、20世紀末と21世紀初頭にかけて、暴力の被害者を世界的に擁護し、被害者自身が自分自身のために語り、世界のなかで承認され、想起される権利を求めるようになったと指摘している。本稿で取り上げた事例の多くが、20世紀末から21世紀初頭にかけて語り始めるようになったことも、忘却から想起へ向かう世界的な風潮と連動している可能性が考えられる。このことから、国内的な視点にとどまることなく、世界の事例との比較検討も必要だと言えるだろう。

おわりに

本稿では、自らの被爆体験を忘却したいがために被爆体験を語らない傾向が、被爆地から離れた場所で顕著であるという石田（1986a）の指摘の重要性を改めて確認することを通して、戦争体験の継承と記録のあり方が問われた戦後75年の節目に、被爆者の沈黙・開口と被爆地からの移動との関係にも着目する重要性を示すことができたといえよう。だが、ここで取り上げた事例は限られたものであるため、多様な被爆者の状況を組み込んだ多数の事例の検討が、今後の本格的な被爆者研究への課題である。言うまでもなく、被爆者の状況は千差万別であり、各々によって異なる多様な記憶と想起の文化行動を想定しなければならないからである。

今後は、広島・長崎県外在住の被爆者について、さらに詳細に被爆体験の想起と語りの文化の特徴を検討し、それらの間の差異と同時に共通性を理解した上で、広島・長崎県在住の被爆者と比較し、広島・長崎県外在住の被爆者について、その想起の文化の特質を把握することを課題としたい。本稿は、そうした研究課題への方向性を示すことができたと思うが、被爆者

の年齢を考えれば急を要する作業である。

注

- 1) 法律上の被爆者は被爆者健康手帳の交付を受けた者であるが、本稿では根本雅也にしたがって、もう少し広く、自身が「原爆にあったと認識している者」(根本2018: 204)と理解する。本稿の問題関心は、被爆者の生活史調査の先駆者であるこの石田の指摘に導かれている。ただ、被爆者の記憶と想起に関する諸分野の研究史の整理は、なお今後の課題である。最近の代表的なもののみを取り上げれば、文化人類学の分野で米山リサの著作(原著1999、邦訳2005)、また歴史学の分野でラン・ツヴァイゲンバーグの著作(原著2014、邦訳2020)が挙げられる。最も層の厚い研究は社会学の分野であり、本稿で検討するように日本の社会学者による研究が積み上げられている。米山の研究は、参与観察に基づく被爆者の文化行動の分析というよりも、むしろ批判理論を志向して、日米権力者のナショナリズムに抱合される被爆者の語りのイデオロギー性を照らし出した作業と言える。したがって、文化人類学固有の被爆者の記憶と想起に関する研究は、未開拓であり、他の研究分野の研究成果を吸収しつつ、この新しいテーマへのアプローチを目指している。
- 2) 戦後、各都道府県在住の被爆者有志によって体験記が刊行され、1990年代以降、広島、長崎、福岡、愛知では被爆者の自分史の会が継続的に開催された。広島では、自分史集『生きる』は第5集まで刊行され、長崎では、自分史集『いのちの証』が刊行された。福岡でも、自分史集が刊行され、愛知では、2008年に自分史の第1集が刊行された。このように広島・長崎県外に移住した被爆者による証言集も刊行されている一方で、本稿で述べているように、特に広島・長崎県外在住の被爆者やそれらの人々が置かれた環境への着目は不十分なままだと思われる。また、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、国立広島・長崎死没者追悼平和祈念館、NHK、朝日新聞などをはじめとして、被爆者の証言映像や手記のアーカイブ化も進められている。これらのなかには、広島・長崎県外在住の被爆者のものもあるものの、現在の居住地による分類はなされておらず、その観点から検索できるようにもなっていない。なかには、現在の居住地については記載がないものも多く、被爆者が国内外に移り住んだ背景や経緯が重視されていない傾向にあるとも言える。
- 3) 厚生労働省 被爆者数(被爆者健康手帳所持者数)・平均年齢(令和2年3月末現在)。https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_13411.html(2020年10月6日取得)
- 4) 1977年5月・6月に16都道府県に居住する100人の被爆者対象に実施。直接、面接を行った。石田は1960年代から長年、被爆者の生活史に重点を置いた調査を行い、被爆者の〈漂流〉と〈抵抗〉のプロセスを明らかにした点が特徴的である。
- 5) 47都道府県が対象とされ、6744票の有効回答を得た。
- 6) 中国新聞社は、被爆から70年経った2015年に全国の被爆者に対し、被爆者アンケートを行い、1,526人から回答を得た。日本被団協の地方組織がある43都道府県(山形、滋賀、奈良、徳島県以外)でアンケートを配布、回収した(中国新聞 ヒロシマ平和メディアセンター[ヒロシマは問う 被爆70年]全国被爆者アンケート 高齢化 継承を懸念 <http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?bombing=2017-112>、2020年6月10日取得)。さらに、中国新聞社は、2014年10月から2015年2月にかけて、在外被爆者に対してもアンケートを行い、461人から回答を得た。韓国と北米(米国とカナダ)については、現地の被爆者団体の協力を得て、それぞれ191人、181人分を主に郵送で集めた。南米のブラジル、アルゼンチン、パラグアイの3カ国については、広島県が派遣した健診団に記者が同行し、調査票を配って、44人分のアンケートを回収した(中国新聞 ヒロシマ平和メディアセンター[ヒロシマは問う 被爆70年]海外で体験伝承少ない傾向 在外被爆者アンケート <http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=83606>、2020年6月10日取得)。これらの被爆者アンケートの結果は表1のとおりである。
- 7) 中国新聞社編(1995)、宇吹(2014)、直野(2011, 2015)に詳しい。
- 8) <https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/no-more-hibakusha/library/shogen/ja/718/>(2020年6月10日取

- 得) インタビュアーの記者とインタビュイーの被爆者の対話が記録されたアーカイブスのひとつであるため、一次資料として扱う。
- 9) 若者に被爆体験を伝えていくために、2008年に愛知県で原水爆禁止愛知県協議会や愛知県平和委員会青年学生部などにより立ち上げられたもの。2008年から2012年にかけての聞き取りは、編集作業のもと、DVD化されている。
- 10) https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=181&dt=200826134403 (2020年6月10日取得)
- 11) https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=1287&dt=200617063214 (2020年6月10日取得)
- 12) https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=199&dt=200827001720 (2020年6月10日取得)
- 13) <https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/no-more-hibakusha/library/shogen/ja/669/> (2020年6月10日取得) インタビュアーの記者とインタビュイーの被爆者の対話が記録されたアーカイブスのひとつであるため、一次資料として扱う。
- 14) https://www.global-peace.go.jp/picture/pic_syousai.php?gbID=754&dt=200617021152 (2020年6月10日取得)

参考文献

- 愛知自分史の会『文集第I集 過去から現在、未来へ そして世界へ』愛知自分史の会、2008年。
- Assmann Aleida, *Das neue Unbehagen an der Erinnerungskultur. Eine Intervention*, C. H. Beck Verlag, 2013. アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の文化：忘却から対話へ』岩波書店、2019年。
- Lifton R. J., *Death in Life: the survivors of Hiroshima*, The University of North Carolina Press, 1968. ロバート・リフトン著、榎井迪夫・湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く：精神的考察』上・下、岩波現代文庫、2009年。
- 石田忠『反原爆：長崎被爆者の生活史』未来社、1973年。
- 石田忠『反原爆〈続〉：長崎被爆者の生活史』未来社、1974年。
- 石田忠『原爆体験の思想化：反原爆論集I』未来社、1986年a。
- 石田忠『原爆被害者援護法：反原爆論集II』未来社、1986年b。
- 中国新聞社編『年表ヒロシマ：核時代50年の記録』中国新聞社、1995年。
- Yoneyama, Lisa, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*. University of California Press, 1999. 山リサ著、小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳『広島：記憶のポリティクス』岩波書店、2005年。
- 濱谷正晴『原爆体験』岩波書店、2005年。
- 中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波書店、2007年。
- 澤田愛子「原爆被爆者の問題と第二・第三世代への影響：被爆三世代へのナラティブ・リサーチを通して」『人間学紀要』(41)、2012年、123-147頁。
- Zwigenberg, Ran, *Hiroshima: The Origins of Global Memory Culture*, Cambridge University Press, 2014. ラン・ツヴァイゲンバーグ著、若尾祐司・西井麻里奈・高橋優子・竹本真希子訳『ヒロシマ：グローバルな記憶文化の形成』名古屋大学出版会、2020年。
- 直野章子『被ばくと補償：広島、長崎、そして福島』平凡社、2011年。
- 直野章子『原爆体験と戦後日本：記憶の形成と継承』岩波書店、2015年。
- 根本雅也『ヒロシマ・パラドクス：戦後日本の反核意識と人道意識』晩誠出版、2018年。
- 宇吹暁『ヒロシマ戦後史：原爆体験はどう受けとめられてきたか』岩波書店、2014年。

キーワード：被爆者、原爆、語り

Abstract

Reconsidering the silence of the *Hibakusha* and their break of silence:
Case studies of the *Hibakusha* living outside Hiroshima and Nagasaki

AIBA, Yui

This paper reconsiders the context of and reasons why the *Hibakusha* would not talk about their experiences and why some have recently started talking about it. A previous study pointed to the tendency among the *Hibakusha* living outside Hiroshima and Nagasaki to try and forget the memories of being bombed, and avoid talking about. However, not enough previous research focused on that. Some studies have shown that the *Hibakusha* who did manage to tell their stories could not necessarily share it with their families. However, some have recently tried to break through their silence. Based on this, this paper focuses on the narratives of those *Hibakusha* living outside Hiroshima and Nagasaki, and reconsiders the relationships between the place where they live and how they dealt with their memories and experiences.

Keywords: *Hibakusha*, Atomic Bomb, Narratives